県立広島大学
Prefectural University of Hiroshima

宮島学センター通信

第2号
平成23年3月25日発行

Prefectural University of Hiroshima Miyajimagaku Center

県立広島大学宮島学センター／
〒734-8558 広島県広島市南区宇品東一丁目1番71号　TEL.082-251-9550　E-mail:miyajima@pu-hiroshima.ac.jp

社団法人宮島観光協会と連携・協力に関する協定を締結しました

本学は社団法人宮島観光協会と連携・協力に関する協定を締結し、平成22年6月18日、嚴島神社祓殿において調印式を執り行いました。来賓として広島県環境県民局学事課・井手野下浩事業調整監、廿日市市宮島支所・佐々木三郎支所長、嚴島神社・福田道憲禰宜にもご臨席いただきました。秋山伸隆宮島学センター長による趣旨説明の後、本学の赤岡功理事長と宮島観光協会の中村靖富満会長が協定書に署名しました。

協定締結によって、より緊密かつ組織的な連携・協力を図り、本学にあっては、宮島学センターを中心とした宮島学の進展と地域社会への貢献を、宮島観光協会にあっては、観光の振興と地域社会の活性化を一層推進していきます。

宮島学センターと宮島観光協会による連携実績

管絃祭の日（7月28日）の夕刻、宮島観光協会が主催し、長浜神社前で地元の方や観光客が提灯を掲げて御座船を出迎え、嚴島神社まで提灯行列を行いました。この提灯づくりに本学の学生が参加しました。

管絃祭の御座船に随行する観光船「あなたも平安気分」に松井輝昭教授が同乗し、管絃祭の歴史について解説しました。

宮島を船で一周する「ぐるっと宮島再発見」（11月14日）の観光船に秋山センター長・大知徳子助教が同乗し、嚴島合戦や御嶋廻について解説しました。

図書館企画展示「美（うるは）しき嚴島―切り取られた姿に見る人々の想い―」に取り組む学生に対して、宮島観光協会から資料に関するご助言をいただきました。

平成22年度「地域文化学(宮島学)」

平成21年度に正規の授業科目としてスタートした「地域文化学（宮島学)」の今年度のテーマは、「信仰」でした。日本地域史、文化史、芸能史を専門とする4名の教員が担当し、2年生を中心として45名が受講しました。

特別講師は、中村靖富満・宮島観光協会会長をお招きし、「宮島観光の現状について」というテーマで授業を担当していただきました。

日程	テーマ	講　師
4／12	厳島神社の神仏分離とその前後Ⅰ	松井　輝昭
4／19	厳島神社の神仏分離とその前後Ⅱ	松井　輝昭
4／26	厳島神社の神仏分離とその前後Ⅲ	松井　輝昭
5／8	フィールドワーク	松井・大知
5／10	宮島観光の現状について	宮島観光協会会長 中村靖富満氏
5／31	厳島神社における平清盛信仰Ⅰ	松井　輝昭
6／7	厳島神社における平清盛信仰Ⅱ	松井　輝昭
6／14	宮島の祭り今昔Ⅰ	大知　徳子
6／21	宮島の祭り今昔Ⅱ	大知　徳子
6／28	戦国大名毛利氏の厳島信仰Ⅰ	秋山　伸隆
7／5	戦国大名毛利氏の厳島信仰Ⅱ	秋山　伸隆
7／12	厳島信仰と法華経Ⅰ	樹下　文隆
7／22	厳島信仰と法華経Ⅱ	樹下　文隆
7／26	第1回レポート報告会	―
10／18	第2回レポート報告会	―

レポート報告会

7月26日と10月18日に「レポート報告会」を実施しました。

報告7分、質疑応答3分という短い時間でしたが、学生たちはレポートの内容を簡潔にまとめ、学びの成果を報告しました。

第1回レポート報告会　テーマ	発表者
①神仏分離による宮島の変化	佐々木　彩 （4年生）
②神仏分離により失われたもの、残されたもの	松崎　友紀 （2年生）
③神仏分離と厳島神社	金口　蓉子 （4年生）
④赤と白の世界	原　加奈美 （2年生）
⑤宮島観光のPR	出口　美和 （2年生）
⑥世界と宮島をつなぐ ―これからの宮島観光	窪田　彩乃 （4年生）
⑦宮島あれこれ満喫ツアー	田中　舞子 （4年生）
第2回レポート報告会　テーマ	**発表者**
⑧宮島の狛犬 ～年代の矛盾から見えてきた ―般型と地域型の混在～	犬伏　詩乃 （2年生）
⑨私が見た狛犬	近藤　志保 （2年生）
⑩上卿屋敷について	田中　緑 （2年生）
⑪大願寺と薬師如来像	仲山　瞳 （2年生）

レポートの一部を紹介します

赤と白の世界

原さんは松井教授担当の「厳島神社の神仏分離とその前後」Ⅰ～Ⅲの授業に触発されてレポートに取り組みました。明治新政府によって1868年に出された神仏分離令に基づいて全国的に行われた神仏分離の影響について、「色」をテーマに考察しました。もともと神仏分離以前の厳島神社は赤色の社殿でしたが、「赤」は仏教の寺院を想像させる色であり、神社にはそぐわないとされ、小さな砂の粒子で赤色を落とし白くしたことで、社殿を存続させました。そこで、神仏分離後の白色の社殿と現在の赤色の社殿を比較し、現在の日本人の心理的立場から見た場合、「赤」と「白（木肌色)」が私たちに与える印象の違いを紹介しました。

宮島観光のPR

出口さんは宮島観光協会の中村会長による特別授業「宮島観光の現状について」の内容を踏まえて、独自に宮島観光のPR方法を考えました。とくに「専門的な目線で楽しむ宮島」について、ホームページを活用してPRする方法を提案しました。

具体的には、専門的知識と観光とを結びつけた情報提供として、ホームページに「神仏分離と厳島神社」「平清盛と厳島神社」というようなテーマ別のモデルコースを掲載することです。とくに「神仏分離」については、松井教授による最新の研究成果も紹介し、関連史跡の解説も掲載することを提案しました。

フィールドワーク「大願寺と嚴島神社春の名品展参観」

5月8日、宮島現地を訪れるフィールドワークを実施しました。フィールドワークは、教室で文献資料や写真を用いて学ぶだけではなく、本物の文化財を自分の目で確かめ、また宮島で暮らす人々と触れ合うことで、これまで見過ごしてきた宮島の魅力を再発見することを目的としています。

午前10時、「地域文化学（宮島学）」の受講者を中心とする学生46名と教職員4名が宮島桟橋に集合し、まず嚴島神社「春の名品展」観覧グループと松井教授が解説する嚴島神社周辺散策グループに分かれました。嚴島神社の宝物収蔵庫では、福田道憲禰宜に展示物について解説していただきました。学生たちは、国宝平家納経の修復の歴史や方法など、はじめて聞く内容に聞き入っていました。名品展では古神宝類や太刀、平家納経唐櫃など約20点を観覧しました。

松井教授が案内する嚴島神社周辺の散策では、宝蔵などを見学しました。学生たちは松井教授による本物を目の前にした解説を熱心に聞いていました。

午後からは大願寺を訪ねて、平山真明住職に大願寺の歴史や秘仏に関する講話をお願いしました。授業で学んだ神仏分離に関する知識を思い出しながら、大願寺が宮島で果たした役割について学びました。講話の後は、平成18年に再興された護摩堂などを拝観しました。

その後、宮島伝統産業会館（みやじまん工房）で「もみじ饅頭手焼き体験」を行いました。

フィールドワーク「管 絃 祭」

「管絃祭」に参加して

7月28日、管絃祭フィールドワークに参加しました。5限目の授業があったため、18時30分のフィールドワーク開始時間には間に合いませんでしたが、19時頃に長浜神社に到着してみると、地元の方々や宮島学園の先生方と生徒たち、そして県立広島大学の学生たちが、楽しそうに提灯を作っていました。すぐにみんなが提灯の作り方を教えてくださったので、私も楽しく作ることができました。地元の方々や観光客のみなさんと触れ合い、こうして管絃祭が盛り上げられていくのだということを知り、これがフィールドワークの醍醐味だなと感じました。

この日は雨だったため、傘で一生懸命提灯を守っていましたが、提灯はみるみるうちに元気のない姿になってしまいました。それでもみなさんは本当に元気で、子供たちもお祭りを楽しんでいる様子でした。

いよいよ地御前神社から長浜神社に御座船一行が近づいてきて、幻想的な光、太鼓の振動、そして管絃の音色、江波や阿賀の漕ぎ手の勇姿に、とても感動しました。管絃祭ならではの感動です。

長浜神社での神事が終わり、提灯行列に加わって嚴島神社に向かいました。提灯の蝋燭の灯を嚴島神社まで守りながら歩くときは、無心だったのをよく覚えています。そして嚴島神社に到着し、御座船が帰ってくるのをひたすら待ちました。

待ちに待ったクライマックス、枡形での三回転。この日一番の素晴らしい光景に出会うことができました。守り続けられてきた伝統の姿、船の漕ぎ手の方たちが懸命に頑張ってきた姿は、まさに世界遺産そのものだと思いました。

最後には、縁起物のおにぎりもいただき、お神輿（御鳳輦）の鳳凰にも触ることができました。それも、宮島の方々の優しさのおかげでした。おにぎりを「縁起物だからいただきなさい」、鳳凰にも「触ってきなさい」と言ってくださったのです。こうして初めての管絃祭フィールドワークは、とても充実したものとなりました。

管絃祭に参加し、改めて宮島の方々や宮島に思いを寄せる方々の力が世界遺産を誕生させ、守り続ける柱となっていることを感じることができました。

（A.K.）

図書館企画展示「美しき厳島」

宮島学センターと広島キャンパス図書館が主催し、平成22年6月15日から29日まで、広島キャンパス図書館2階で、図書館企画展示「美(うるは)しき厳島―切り取られた姿に見る人々の想い―」を開催しました。宮島関係資料の展示は今回で3回目ですが、新聞・テレビでも報道され、期間中に約540人の方が観覧されました。

展示は、学芸員養成課程の授業（担当：松井教授）を受講する人間文化学部国際文化学科の4年生3名（中川瑛梨、門枡美紀、渡邊彩加）と3年生3名（多田恵美、新山沙織、山本千晶）が担当しました。

昨年度の展示を担当した院生3名（住吉春子、福井理恵、山田優子）の助言のもと、展示計画の立案、展示資料の選定、図録やキャプションの原稿作成、展示作業など、すべて学生が自分たちで行いました。とくに4年生は、ゼミや就職活動の合間を縫って毎日夜遅くまで資料の調査・研究、原稿作成などに没頭していました。

今年度は新しい試みも始めました。一つは、事前準備の一環として、財団法人広島市文化財団広島城の篠原達也学芸員にお願いして、資料の取り扱いなどについてご指導いただいたことです。

篠原学芸員の豊富な経験に裏付けられた講話によって、学生は資料の取り扱い方、展示計画やより見やすいキャプションの作り方などを学ぶことができました。また、学生が作成したポスター案についてもご助言をいただきました。

もう一つは、学生たちが宮島の現地を訪れ、さまざまな場所で取材したり、地元の方々から聞き取り調査を行って、その内容を展示に反映させたことです。とくに廿日市市立宮島歴史民俗資料館・高橋修三館長、瀬田薬局・瀬田律義氏、つただに仙岳堂のみなさんからは、多大なご教示をいただきました。

また、宮島観光協会の舩附洋子企画広報課長からは、大鳥居の模型を展示資料として貸与していただきました。昨年までは、本学所蔵の宮島関係の古文書、絵図、絵葉書等を展示してきましたが、はじめて学外から借用した資料も展示しました。

借用の際の調書の作成、資料の梱包なども学生が行いました。大鳥居に関する展示を担当した中川瑛梨さんは、「お借りした模型の取り扱いについては、最後まで緊張しましたが、無事に返却することができて、ホッとしました」と語っていました。

展示期間中に、学生による展示説明会を4回実施しました。約30分の説明の後、多くの来場者から担当の学生にご質問や激励の言葉をいただきました。また、宮島にお住まいの方や宮島について研究されている方から、資料に関するご助言をいただきました。

8月11日のオープンキャンパスでは、宮島学センター展示室に図書館企画展示の内容の一部を再現し、高校生や保護者など約70名にご来場いただきました。また、大講義室では学生3名によるプレゼンテーション「宮島学」も行いました。

また、10月25日には廿日市市立宮島小・中学校文化祭で宮島関係資料の展示「美しき厳島」を行いました。この展示は、4年生の門枡さん、中川さんに加えて、10月から同校の授業を見学し、英語科の授業や学級経営などを学んでいる桝平静香さんも参加しました。

展示を担当した学生の感想

今回の企画は小さな気づきをまとめ、ストーリー化してみようと試みました。気づきが調べていくことによってだんだん形になっていくことの難しさ、楽しさを実感できたように思います。この展示は、宮島観光協会や宮島の住民の方々、展示を見に来られた方など多くの人と出会い、宮島の魅力を感じることができる機会でした。（門枡　美紀）

私は絵を描くことが好きで、作品から伝わる「美」に着目する今回の展示はとても興味深かったです。現在売られている絵葉書からも何か発見があるかもしれないと興味がわきました。（渡邊　彩加）

展示に向けて調べていく中で、厳島をより深く感じることができました。絵図や絵はがきなどに込められた、人々の想いをくみ取っていくのは楽しかったです。（中川　瑛梨）

主な展示資料（目録）	
序　章	往来 ―絵・人を運ぶ―
	日本三景ノ一厳島神社と大鳥居
	パンフレット「旅館かめ福本店」
第一章	印刷 ―制作状況・技・模様―
	安芸土産厳島名所図会　明治35年（1902） （著作兼印刷発行人　田井久之助 特約大発行所　厳島物産卸商　沼田榮三郎）
	絵はがき「（安芸厳島）大鳥居遠望」
	日本三景ノ一　厳島実地真景之図　明治30年（1897） （著作兼発行人　田井久之助／発行所　清水為蔵）
第二章	建造物 ―目に見えるもの―
	厳島名勝写真帳　附案内記　明治41年（1908） （編輯兼発行者　高砂屋瀬田春錦堂　瀬田格一 印刷者　瀬田律三）
	芸州厳島細見之図　天保10年（1839） （改正再板　小方屋治兵衛）
	絵はがき「安芸厳島神社曽我兄弟燈籠」
第三章	文芸・神事 ―目に見えないもの―
	絵はがき「安芸厳島神社全景」
	安芸　厳島全景図　明治43年（1910） （画作兼印刷発行者　瀬田律三／発行所　高砂屋瀬田春錦堂）
	厳島御島廻之図記「御島廻リ七里七浦拝所之次第」

日本三景ノ一
厳島実地真景之図
明治30年（1897）

全国厳島神社参詣記 ②

下関市・厳島神社

所在地：山口県下関市新町一丁目651-1
参拝日：平成22年5月

JR下関駅より自転車で約10分、高杉晋作縁の地の案内板横を抜けた先の、小高い丘の上に建っていた。石段の登り口に二ノ鳥居があり、道路をはさんで海側に一ノ鳥居がある。

火災により焼失した社殿のうち、本殿は平成13年、拝殿と翼社は平成19年にそれぞれ再建された。

境内の説明板によれば、御祭神は厳島三女神。由緒としては、次のようなことが書かれていた。

- 安芸国の厳島大明神が平家の守護神として、安徳天皇の御座船に祀られていた。
- 壇ノ浦の合戦後、磯辺に御鏡太刀が放棄されていたのを里人たちが見つけ、文治元年（西暦1185年）社殿を建立した。
- その際、安芸国厳島神社よりあらためて勧請した。

残念ながら、当時の文献資料などで確認することはできなかったが、平家滅亡の地でも厳島大明神が信仰されていることを感じた。

下関の厳島神社から自転車で20分くらいのところに、安徳天皇を祀る赤間神宮が鎮座する。一方、安徳天皇を抱きかかえて海に入った二位の尼の亡骸は、海流に乗って安芸国厳島の有ノ浦に流れ着いたと伝えられている。埋め立てなどで場所は移動しているようだが、現在も二位ノ尼の祈念燈籠が建てられている。

廿日市市立宮島小学校では、平成21年度、22年度の修学旅行で壇ノ浦や赤間神宮、下関厳島神社を訪れ、「平家の繁栄と滅亡」について学習している。平家一門の信仰によって繁栄した宮島に暮らす子どもたちが、壇ノ浦の合戦に想いをはせた。

（大知　徳子）

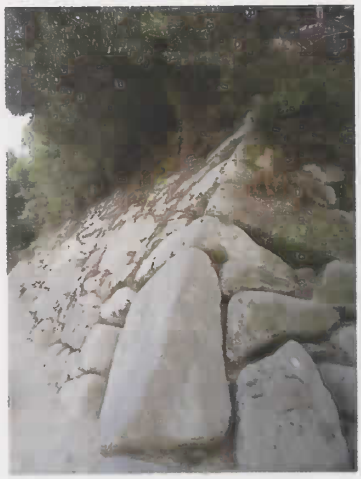
研究余録②

宮島の石垣

石垣といえば、「城」を連想しますが、宮島にも多くの石垣があります。石で造られた狛犬や燈籠のようには目立ちませんが、石垣もまた宮島の歴史を語る証人です。

たとえば、吉川広家自筆書状（『吉川家文書別集』674号）に、「厳島石垣」工事のため「石つき之もの共」と呼ばれる石垣築造の職人集団を動員する、と記されています。書状の年代は特定できませんが、書状の中で広島城下の「堀河」（平田屋川のこと。現在の並木通り・地蔵通りに相当します）の工事がほぼ終わった、としていますから、文禄年間から慶長年間初め（1590年代）のことと思われます。

このとき築かれた石垣は、現在でも残っています。木村信幸氏（広島県教育委員会文化財課）によると、厳島神社の北東側にある石垣がそれに相当します。客神社から本社に向かう途中、東廻廊から見える石垣です。大きな立石を適当な間隔を空けて配置するという築造の仕方が、山県郡北広島町に点在する吉川氏関係の館跡や寺院跡の石垣と同じ特徴を示しているからです。



また、吉川氏配下の職人集団による築造とは特定できませんが、ほぼ同じ時期の石垣と思われるのが、千畳閣の下（北側）の石垣です。御笠浜の石大鳥居と公衆トイレの間の山側に見える石垣です。この石垣は、毛利輝元時代の広島城の石垣と同じ積み方です（たとえば天守閣を支える天守台の石垣など）。

ただし築造当時の石垣がそのまま残っているのは、長さ約30メートル程で、それ以外は後世に築かれたものです。どこからどこまでが毛利氏時代の石垣か、識別してみてください。

（秋山　伸隆）

「猿瓦」をご寄贈いただきました

宮島にお住まいの方から、「猿瓦」をご寄贈いただきました。

江戸時代の宮島では、猿が民家の屋根の瓦を持ち上げて、その下にいる虫を食べていたそうです。宮島では、猿による被害を防ぐために、猿が持ち上げることのできないほど大きくて重たい瓦を用いるようになったそうです。

猿瓦

編集後記

宮島学センター通信第2号をお届けします。

今回は「地域文化学（宮島学）」と図書館企画展示に関連する取り組みを紹介しました。学生による地域の方々への取材などで、多くの方のご協力をいただきました。今後とも本センターへのご支援をお願いいたします。　（0）

編集・発行

宮島学センター通信　第2号
平成23年3月25日発行

県立広島大学宮島学センター
〒734-8558 広島県広島市南区宇品東一丁目1番71号
TEL.082-251-9550
E-mail:miyajima@pu-hiroshima.ac.jp
ホームページ:
http://www.pu-hiroshima.ac.jp/miyajimagaku/index.html